

CONTENTS

文化庁月報

1994 5 No.308

特集●生活文化の振興

- 巻頭言 生活文化をめぐって 加藤秀俊 4
- 生活文化振興への取り組み 6
 - (社)日本おもと協会 / (社)日本将棋連盟 / (社)全日本愛鱗会 /
 - (社)日本フラワーデザイナー協会 / (財)ファッション振興財団 /
 - (社)日本コントラクトブリッジ連盟 / (財)日本いけばな芸術協会 /
 - (財)人形美術協会 / (社)表千家同門会 / (財)日本きもの文化協会 /
 - (財)日本棋院 / (財)日本食生活文化財団 / (社)日本建築美術工芸協会 /
- 福岡県の生活文化行政
- 盆栽文化の国際化事業に思う (社)日本盆栽協会 16

都道府県のページ

- ご存じですか? こんな文化財⑩
- 銅造如来坐像、長崎市東山手・南山手 20
- 一度は行きたい博物館・美術館⑩
- 鹿児島県立博物館 23

・「人間国宝を訪ねて」の連載開始にあたって… 26

ちよつと一息

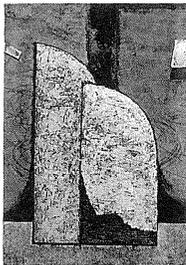
女性の映画100年 / 松本侑壬子…18

ACA(Agency for Cultural Affairs) NEWS

- 重要文化財の新指定(美術工芸品関係-1) ……29
- 日本芸術院賞受賞者決まる ……34
- 平成5年度芸術選奨決まる ……36
- 平成5年度芸術作品賞決まる ……39
- 平成5年度文化庁優秀映画作品賞決まる ……40
- 平成5年度舞台芸術創作奨励賞決まる ……42
- 平成6年度中学校芸術鑑賞教室公演日程決まる ……43
- 平成6年度移動芸術祭・同巡回公演
春季公演日程決まる ……44
- 著作権法利用講座⑩ ……28
- 芸術文化振興基金ニュース ……46
- 今月の国立劇場 ……47
- 編集後記 ……48

イベント案内

- 運慶・快慶とその弟子たち / 奈良国立博物館 ……45



「軌跡-92B」
 嶋田善雄 / 作(平成4年度文化庁買上作品)
 しまだ・よしお / 昭和24年長野県生まれ。
 48年日本大学芸術学部卒。53年日本版画協会
 展出品以後、毎回出品するとともに、同年より
 個展も多数開催。54年第一回JAG展銀賞。
 平成4年国展新人賞。現在は児童美術家連盟
 会員。

イラスト / 赤羽根秀一

女性の映画100年

松本侑壬子

ちよつと一息

文化の香りをあひなに

来年は映画が誕生して百年目。映画の草創期には、今よりもっと女性監督が活躍していたことはあまり知られていない。

例えば、フランスのアリス・ギー・ブラシエは女性監督第一号であると同時に、恐らく世界最初の劇映画を撮った人物ではないか、といわれている。

パリにあるカメラ機材会社の秘書だったアリスが、取引先のリュミエール兄弟の発明したシネマトグラフに夢中になり、社長の手許を得て、友人姉妹の協力で数分間の劇映画「キャベツの妖精」を撮ったのが一八八六年。映画の魅力の一つである「物語性」に目を付けたのである。

スクリーンに映し出される「まことしやかなウソ」の世界でも、だからこそ現実よりも、場合によっては人生の真実を具體的情緒的に人の心に訴える力があることを、直観的に見抜いたに違いない。映画の発明当初、男たちが主にその技術的なおもしろさに心奪われ、映画を「見せ物」として扱いがちだったのと対照的だ。

二十三歳（二十一歳説もある）のアリスは、どんなにわくわくして初めての劇映画を撮ったことだろう。アリス・ギーは結婚後、アメリカへ渡り、生涯に長短合わせて七百数十本のあらゆるジャンルの映画を撮ったという。「どんな映画だったのだろう、一本でも見てみたい」——ここ数年心に引つ掛かっていた私の思いが、この春かなえられた。

三月末にパリ郊外のクレイユ市で開かれた第十六回国際女性映画祭「フィルム・ド・ファミ」で、アリス・ギー作品が十四本も特別上映され、私は年度末の休みを利用して、友人のマシヨンに居候をしながら毎日見に通ったのである。この映画祭は、世界各地にある女性の映画祭のうちでも最も歴史が長く、規模も大きく、権威あるものだ。日本の岩波ホール総支配人高野悦子さんがプロデューサーを勤める東京国際映画祭・国際女性映画週間もこのフィルム・ド・ファミと協力関係にある。

「フィルム・ド・ファミ」では世界中の女性監督作品はかり約二百本が二週間にわたって上映され、期間中約三万人の観客が集まるという。メイン会場の市文化会館には定員千人、五百人、百人程度の三ホールがあり、ほかに市内の映画館二つを借り切って、常時七会場で映画が上映される。

長短編の劇・記録映画五十二本が参加したコンペティションの今年の審査委員長は女優ミレーヌ・ドモンジョ。特別上映はポーランドのアグネシユカ・ホランド監督の「秘密の花園」、カトリヌ・ドヌーブの自選による作品連続上映などの特集、仏

大物監督のアニエス・ヴァルダさんも特別招待されて観客と討論するなど、華やかな催しがそろうつていた。

その中で今年最大の「目玉」は、映画初期の無声映画時代と現代の最先端実験映画の女性監督に焦点を当てた特別企画「映画のバイオニアたち—昨日・今日」。とりわけ、アリス・ギー作品をはじめ現存している数少ない当時の女性監督作品を一堂に集めた連続上映は、映画祭委員長のジャック・ピュエさんによれば「他に類例がないはず」の充実したものだ。実際私自身、これがお目当てで映画祭に参加したようなものだった。

アメリカン・フィルム・インスティテュート（AFI）で今世紀初頭の無声映画のカタログ作りのために資料を調べているうちに、当時あまりに多くの女性監督がいたことに驚いて本格的に研究を始めた、という米国の映画研究家の協力で実現した企画だったという。

アリス・ギーはその後離婚して帰国したが、安任の地はなく、一九六八年に亡くなるまでの後半生は細々と絵本などを売って生計を立てながら、かつての自作を探し求める日々だったという。自伝の出版も生前にはかなわなかった。

今回のフィルム・ド・ファミでは、その後発見された一九〇二年〜三年までの作品の一部が上映されたのである。八十〜九十年前の女性監督作品——当時は恐らく「女性映画」とか「女の視点」とかを特別に意識していたとは思えない。むしろ、男女を問わず好奇心と夢が一杯の、映画というもののおもしろくわくする楽しさにあふれた作品ばかりだった。

その他のアメリカの無声映画の女性監督たちの作品も初めて見るものばかりだった。メロドラマあり、喜劇あり、堂々たる長編西部劇まであって、予想外に幅広い活躍ぶりに驚いた。

しかし、アリス・ギーをはじめ彼女らの経験や才能は、トリーキーへ移り一大産業化へ向かい始めたハリウッドの映画製作所の中で生き延びえず、消えていってしまったのだ。

その間の半世紀近くの間は、女性監督はほんの一握り。七〇、八〇年代になってから世界各地で群れをなして登場した女性監督たちが、今再び映画に新しい風を巻き起こし始めている。フィルム・ド・ファミの今年のグランプリ（長編劇映画）は香港のクララ・ロー監督の「ユー・セン」（ある僧侶の誘惑）が獲得した。香港アクション映画の伝統を生かした激しい戦闘場面も、濃密なエロチシズムも、そして愛をめぐる男女の心理的かつどうもダイナミックな娯楽時代劇の中につかり描かれていた。おもしろい映画には本来、男女監督の力の差はないのだ。今、世界には劇映画の女性監督が八千人活躍しているという。その中にはロー監督のように、若く力のある人物が続々登場してきているのである。あまりにも寂しい日本映画の現状を見るとき、一女性映画ファンとして黙って見ていいのだろうか、との思いは募る一方である。



まつもと ゆみこ

鳥取県生まれ。津田塾大卒。翻訳、秘書、教師の後、1968年共同通信社入社。国際局海外部で英文記者を経て、70年から編集局文化部記者。映画、女性問題、ファッション、児童文学、生活経済など幅広い分野を担当。90年同部次長。日本映画ペンクラブ会員。文化庁優秀映画専門委員。

5月文化庁行事予定

- 10日・平成6年度芸術家在外研修員懇親会（国立教育会館内レストラン）
・平成6年春の叙勲 勲章及び賜杯伝達式（日本青年館）
- 13日・平成6年春の紫綬褒章、藍綬褒章及び黄綬褒章伝達式（如水会館）
- 20日・文化財保護審議会（文化庁）
- 25日・都道府県宗教法人事務主管課長会議（都道府県会館）
- 31日・日本芸術院授賞式（日本芸術院会館）
・日本芸術院新会員・受賞者宮中お茶会（宮中）
・日本芸術院新会員・受賞者文部大臣招待晩餐会（赤坂プリンスホテル）



文化庁月報 5月号 (通巻308号)

平成6年5月25日印刷・発行

編集—文化庁
〒100 東京都千代田区霞が関3-2-2
発行—株式会社ぎょうせい
本社 〒104 東京都中央区銀座7-4-12
電話03(3571)2126
営業所 〒162 東京都新宿区西五軒町4-2
電話03(3268)2141 (代表)
振替口座 東京9-161番
印刷所—(株)行政学会印刷所

定価530円(本体515円)送料76円
年間購読料6360円
本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込み下さい。

広告の問い合わせ・申し込み先
(株)ぎょうせい営業第一課宣伝係
電話03(3269)4145 (ダイヤルイン)
©1994 Printed in Japan
ISSN 0916-9849

編集後記

今月号より新たに担当となりました。誌面のより一層の充実を図っていくかと思っておりますので、よろしくお願いたします。春眠暁を覚えず、というわけではありませんが、五月号の発行が大幅に遅れてしまい、大変心苦しく思っております。新年度早々このようなことでは先が思いやられますが、来月号以降、順次発行日を詰めていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

さて、今月号では、初めて「生活文化」を特集として取り上げました。「生活文化」は私達の日常生活と表裏一体をなすものであり、行政がどこまで介入できるかという難しい問題も残っており、まさにこれから検討していかなければならない新しい行政分野のひとつではないでしょうか。また、今月号では、新企画「人間国宝を訪ねて」の予告編として、高田都耶子さんのお話と解説でまとめました。本編は、いよいよ来月号からはじまりますので、乞う御期待。

(栗)